

漢族系台湾人高年層の日本語使用

一言語生活史調査を通じて―

合津 美穂

キーワード：漢族系台湾人高年層、発話形態、私的場面

「台湾人」俗日本語、アイデンティティの象徴

要旨

本論では、1998年に実施した言語生活史調査の分析を通じ、日本統治時代に日本語による教育を受けた漢族系台湾人高年層の日本語使用実態を通時的に捉え、漢族系台湾人高年層間における日本語使用の要因を社会言語学的な観点から考察した。その結果、次の3点を指摘し得た。

- ①公的場面における日本語の使用は台湾の政治・社会状況に応じて変化しているが、私的場面においては、日本統治時代に教育を受けた漢族系台湾人の間で、今なお日常的に日本語を使用し続けている。
- ②現在、公的場面で使用しているのは比較的標準的な日本語である「「台湾人」標準日本語」、私的場面において中学校・高等女学校時代の同級生や日本語のできる配偶者との間で使用しているのは他言語と日本語が混じった「「台湾人」俗日本語」である。
- ③中学校・高等女学校時代の同級生との間で「「台湾人」俗日本語」を使用しているのは、日本統治時代の中学校・高等女学校の学生としてのアイデンティティを象徴している日本語が混じった「「台湾人」俗日本語」を使うことによって、仲間意識・連帯意識を確認し、共有し合うことができるためではないかと考えられる。

1. はじめに

台湾では、日本によって統治された1895年から1945年の50年間にわたり、日本の植民地政策の一つとして日本語普及が推進された。日本統治時代が幕を閉じてから50年以上を経た現在でもなお、台湾の高年層の中には、日本語を使用している人々がいる。日本統治時代から現在に至るまで、彼らはどのように日本語を使用してきたのだろうか。また、なぜ、今でも日本語を使用しているのだろうか。

1998年に、原住民族の一つであるアタール族と、漢民族の閩南系・客家系の高年層に対し、言語使用意識に関する面接調査を行った簡(1999・2000)は、高年層が使用している日本語の機能を、①異なる言語集団の高年層同士の共通語、②秘密ごとを話し合うときに使う、いわゆる隠語、③計算、の3つにまとめている。論者は、1998年7月から9月にかけて、日本統治時代を経験した漢民族の閩南系・客家系の高年層に対して言語生活史調査を面接方式で行った。その結果、閩南系・客家系間だけでなく、閩南系同士、客家系同士といった同じ言語集団に属し、共通言語を有する漢民族高年層間において、日本統治時代だけではなく現在もなお、日常的に日本語を使用し続けていることがわかった。この結果は、簡(1999・2000)で指摘された、「異なる言語集団の高年層同士の共通語」といった機能からだけでは説明できないものである。また、言語使用場面を分析したところ、「隠語」、「計算」といった機能とはまた別の

要因によると考えられた。

本論では、面接調査で収録した談話資料を分析し、日本統治時代に日本語による教育を受けた漢民族の高年層の人々が、漢族系間においてどのように日本語を使用してきたのかを、通時的に捉えてみたい。その上で、なぜ、現在まで漢族系間において日本語を使用し続けているのか、社会言語学的な観点から考察を加えたい。なお、本論では、話しことばにおける日本語の使用に限って、分析・考察を進める。以下、文献の引用にあたり、漢字の旧字体は新字体に改めた。引用文中の「台湾語」は閩南語、「中国語」は北京語を指す。プライバシーに配慮し、インフォーマントの氏名は仮称とする。

2. 台湾の漢民族とその言語

台湾に住む漢民族と彼らが使用している言語について、概観しておきたい¹⁾。日本統治時代、台湾に居住していた住民は、漢民族、原住民、日本内地からの移住者である日本人、外国人、朝鮮人から構成されていたが、漢民族が人口の大多数を占めていた。図1は、1934年末現在の台湾全島の総人口と住民構成比率である²⁾。台湾全島の総人口は5,194,980人、そのうち漢民族が総人口の90.0% (4,676,259人) を占め、次いで日本人5.1% (262,964人)、原住民4.0% (206,029人)、外国人0.9% (48,412人)、朝鮮人0.0% (1,316人) であった。当時、台湾の漢民族は、中国大陆の福建地方や広東地方からの移住民から成っていたが、なかでも福建地方からの移住民の比率が非常に高かった。1934年末現在では、総人口に占める福建系住民の比率は75.9% (3,942,139人)、広東系住民14.1% (733,910人)、その他の地方からの移住民0.0% (210人) であった。

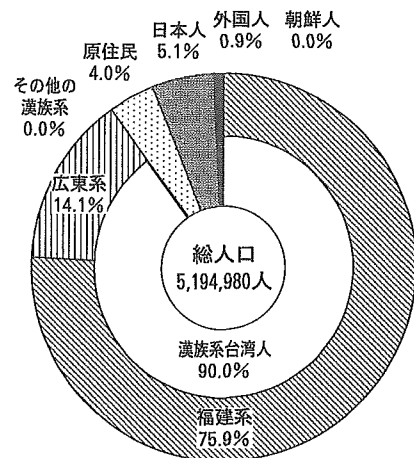


図1 台湾全島の総人口と住民構成比率
(1934年末現在)

台湾の漢民族は、閩南語と客家語のいずれを母語とするかによって閩南系並びに客家系とに二分される。主として福建系の移住民は閩南語、広東系の移住民は客家語を母語としていた。閩南語と客家語は、ともに中国語諸方言の一支であるが、相互に通じ合うことができないほど隔たっている。閩南系と客家系とでは、言語だけでなく、信仰、結婚や葬式の習俗、住居、衣服など、日常生活上の様々な面における伝統的風俗習慣にかなりの違いがある。また、19世紀中頃まで、出身地が異なる移住民の間で、土地などの資源をめぐる利害争いが頻発していた。そのため、先に移住した閩南系住民が沿岸地帯の平地部に、客家系住民は中央山脈に接した山麓地帯にと、地域的に分かれて集住する傾向が生じた。20世紀に入って、台湾島内のインフラ整備と産業振興が進むにつれ、次第に都市部にも客家系住民が居住するようになった。客家系住民が少ない都市部では、多数派の言語である閩南語が使えないと、日常生活上、不便も多く、客家語の他に閩南語を習得・使用している客家系住民もいた。

現在、台湾に居住している住民は、漢民族と原住民に大きく分けることができる。漢民族のうち、1945年8月15日の太平洋戦争終了後、国民党とともに中国大陆から台湾に移住してきた人々は外省人と呼ばれ、それ以前から台湾に住んでいた人々は本省人と呼ばれている。外省人の中国大陆での出身地は様々であり、外省人の言語は、北京官話を主体にして、大陸各省・各地方の方言も使用されているという。

現在の台湾の住民構成比率は、閩南系住民が総人口の73.3%を占め、次いで外省人が13%、客家系住

応変に質問を行うという方法をとった。調査においては、インフォーマントの方々の調査に対する深いご理解とご協力により、話者によって調査内容に偏りがあるといった限界はあるが、光復後の言語生活についても予想以上に多くの情報を得ることができた。

日本統治時代に日本語を習得したインフォーマントは、調査時においても高い日本語力を保持していたため、調査は全員日本語で行った。全ての方から承諾が得られ、調査の内容をテープに録音した。本論では録音資料を文字化した談話資料を用いる。

3-2. インフォーマントについて

言語形成期を台北市で過ごしたのはA氏とB氏、高雄市はC氏、屏東市はD氏とE氏、台中州大甲郡清水街はF氏、台中州東勢郡東勢街はG氏、台北州羅東郡三星庄はH・I・J氏である。表2は、1925年末現在の各地点における漢族系住民の構成と人口である⁵⁾。A・B・C・H・I・J氏が住んでいた台北市・高雄市・台北州羅東郡三星庄は、閩南系住民が大多数を占めていた。F氏の出身地

	閩南系	客家系	その他	合 計
台北市	137,000	900	0	137,900
高雄市	32,900	100	1,500	34,500
屏東市	21,600	1,700	500	23,800
清水街	26,300	0	0	26,300
東勢街	10,400	8,700	600	19,700
三星庄	8,000	700	1,400	10,100

表2 調査地点における漢族系住民の構成と人口（1925年末現在）

である台中州大甲郡清水街には、閩南系台湾人しか住んでいなかった。D・E氏が住んでいた屏東市（屏東街）は、他の地点に比べて客家系住民が比較的多かった。台中州東勢郡東勢街は客家系住民の多い地域で、G氏は東勢街郊外にある客家系台湾人の部落に住んでいた。

男性はA・D・E・H・I氏の5名、女性はB・C・F・G・J氏の5名である。

調査時点の年齢は、60歳代がC・E・F氏、70歳代がA・B・D・G・H・I・J氏。最年長者はH氏で76歳、最年少者はC氏で68歳である。1945年の光復時、H氏は23歳、C氏は15歳だった。

母語が閩南語であるのはF・H・I・J氏、客家語はA・B・D・E・G氏。C氏は客家系台湾人だが、日本語が堪能な両親に日本語で育てられたため、日本語が第一言語だった。客家語は、日本統治時代は少しできる程度で、光復後に習得した。

現在、閩南系のF・H・I・J氏は閩南語・日本語・北京語を、客家系のA・B・C・D・E・G氏は客家語・閩南語・日本語・北京語を使用することができる。客家系のインフォーマントは、閩南語も習得している。A・B氏は台北市、D・E氏は屏東市という閩南系住民が多く住む地域に居住していたため、公学校入学後、閩南系の友人との間で閩南語を習得した。C・G氏は、光復後に屏東市に転居してから閩南語を習得した。日本語は、全員が日本統治時代に習得し、使用していた。北京語は、全員、光復後に習得している。

学歴について。C氏以外のインフォーマントは、主として漢族系の子弟が通った公学校、C氏は主として日本人子弟が通った小学校を卒業している⁶⁾。B氏は公学校卒業後、台北市内のタイピスト養成所に通った。中学校には男性インフォーマント全員が進学している。H氏とI氏は日本内地の中学校に1年間留学した後、台湾島内の中学校に編入した。A・D・H・I氏は台湾島内の中学校を卒業後、日本内地の大学進学を目指して渡航した経験がある。高等女学校に進学したのはC・F・G・J氏である。G氏は台湾島内の公学校を卒業後、日本内地の高等女学校に進学した。A・D・G・H・I・J氏は日本統治時代に、C・E・F氏は光復後に、中学校・高等女学校を卒業している。

職歴について。教員だったのはD・H・I・J氏。D氏は、光復後、初等中学の教員になり、定年退

職するまで勤めた。H・J氏は、日本統治時代から定年退職するまで教員を続けた。I氏は、光復後8年間、国民学校で教えた後、企業へ転職した。日本企業に勤務した経験を持つのはB・G氏。B氏はタイピスト養成所を修了後、台北市内の日本企業にタイピストとして勤務し、光復後、日本人が引き揚げてからも、1949年までその会社で働いていた。G氏は高等女学校卒業後も、日本に残り、終戦まで日本企業に勤務していた。A氏は光復後、台北市内の建築会社に就職した。C氏は光復後に高等女学校を卒業し、高雄市内の銀行に5年間勤めた。E氏は光復後に中学校を卒業した後、家業を継いだ。F氏は家長の方針により就職しなかった。現在、E・H氏以外は無職である。E氏は台北市内の企業の顧問を、H氏は羅東鎮内で果樹の苗を育成している。

家長の職業は、茶商（A氏）、製造業（B氏）、公務員（C氏）、実業家（D氏）、大地主（E氏）、製造・貿易業（F氏）、造林業（G氏）、地主・精米所会計役（H氏）、米問屋（I氏）、地主（J氏）であった。家長は全員、仕事上、日本人と接触する機会があった。日本統治時代に日本に渡航した経験があるのは、B・C・D・E・F・G氏の家長。G氏の家長は日本内地の農林学校を卒業している。

全員のインフォーマントに、日本語能力を持つ家族がいる。両親共に日本語が堪能だったのは、B・C氏。B・C氏の母親は結婚前、公学校の教員だった。D・G氏の母親は日本語ができなかったが、父親は日本語ができた。日本統治時代に学校教育を受け、日本語能力を持つ兄弟・配偶者がいるのは、H氏を除いた全員である。日本語ができる子弟を持つのはC・E氏とD・G氏の家庭。日本語ができる孫を持つのは、C・E氏、D・G氏とH氏である。C・E氏の子弟と孫、D・G氏の子弟、H氏の孫は、台湾ないし日本の教育機関等で日本語を学習しているが、D・G氏の孫は、日本から取り寄せた小学校の国語の教科書を使って、D氏から学んだそうである。

日本統治時代、国語常用家庭⁷⁾ だったのはB氏とC氏の家庭。改姓名をし、日本名を持っていたのはC氏とI氏である。

(1998年9月現在)					
	A	B	C	D	E
出身地	台北市	台北市	高雄市	屏東市	屏東市
性別	男	女	女	男	男
生年月日	1923年1月21日	1927年2月6日	1930年3月19日	1923年3月1日	1929年2月24日
母語	客家語	客家語	日本語	客家語	客家語
習得言語 (習得順)	閩南語	閩南語	客家語	閩南語	閩南語
	日本語	日本語	閩南語	日本語	日本語
学歴	北京語	北京語	北京語	北京語	北京語
	中学校卒業	公学校卒業	高等女学校卒業	中学校卒業	中学校卒業
職歴	建設会社勤務	日本企業勤務	銀行員	初等中学教員	家業手伝い・企業顧問
家長の職業	茶商	製造業	公務員	実業家	大地主
日本語能力を持つ家族	兄弟・配偶者(B)	両親・兄弟・配偶者(A)	両親・兄弟・配偶者(E)・子・孫	父・兄弟・配偶者(G)・子・孫	兄弟・配偶者(E)・子・孫
備考		国語常用家庭	国語常用家庭・改姓名		

	F	G	H	I	J
出身地	台中州大甲郡清水街	台中州東勢郡東勢街	台北州羅東郡三屋庄	台中州羅東郡三屋庄	台北州羅東郡三屋庄
性別	女	女	男	男	女
生年月日	1930年2月10日	1923年11月19日	1922年6月8日	1922年11月22日	1924年5月30日
母語	閩南語	客家語	閩南語	閩南語	閩南語
習得言語 (習得順)	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
	北京語	閩南語	北京語	北京語	北京語
学歴	高等女学校卒業	高等女学校卒業	中学校卒業	中学校卒業	高等女学校卒業
職歴	なし	日本企業勤務	国民学校教員	国民学校教員 磁器会社勤務	国民学校教員
家長の職業	製造・貿易業	造林業	地主・精米所会計役	米問屋	地主
日本語能力を持つ家族	兄弟・配偶者	父・兄弟・配偶者(D)・子・孫	孫	兄弟・配偶者(J)	兄弟・配偶者(I)
備考				改姓名	

表3 インフォーマントの一覧

4. 漢族系台湾人間における日本語使用の実態

日本統治時代から現在に至るまで、インフォーマントは日本語をどのように使用してきたのだろうか。時代を、「日本統治時代」、1945年8月15日の「光復後」、そして調査を実施した1998年7月から9月当時である「現在」、の3つに区分し、各時代・時期における日本語使用の状況を、談話資料の分析を通じて明らかにしたい。

紙幅の関係上、談話資料の引用をする際は、インフォーマントの発話のみ記述する。会話特有の言いよどみや重複、文意を不明にするような明確な言い間違いについては適宜除く。文意を補う場合は（ ）に記し、イントネーションの上昇は？で示す。話者は〔 〕に記す。

4-1. 日本統治時代—公的場面と私的場面における使用—

台湾総督府による日本語普及政策は、1895年から1945年までの全統治期間にわたって推進された。50年間を一貫して、学校教育が日本語普及政策の中心として位置付けられていたことが大きな特徴である⁸⁾。

大多数の漢族系児童が収容されていた公学校の目的が「本島人ノ子弟ニ徳教ヲ施シ実学ヲ授ケ以テ国民タルノ性格ヲ養成シ同時ニ国語ニ精通セシムル」⁹⁾ こととされていたことから、学校教育において日本語教育が重視されていたことがわかる。1937年に日中戦争が始まると、皇民化運動が本格化するとともに、学校教育だけでなく、社会全体で日本語普及が取り組まれることになった。¹⁰⁾

こうした日本語普及政策の下、学齢期にあって日本語による教育を受けていたインフォーマントは、どのような言語生活を送っていたのだろうか。

談話資料を分析した結果、インフォーマントは、公的場面と私的場面双方において、漢族系台湾人との間で日本語を使用していたことがわかった。以下、各場面における日本語使用をみていきたい。

4-1-1. 公的場面

面接調査では、公的場面として「学校・商店・病院・郵便局・銀行・駅・図書館・役所」を設定し、各場面における使用言語を尋ねた。学校と学校以外の場面に大きく分けて、日本語使用状況をみていこう。

○学 校

学校における言語使用については、「次の場合（学校内：授業中・休み時間）、生徒たちは先生に対して何語で話しましたか？」「次の場合（学校内：授業中・休み時間・喧嘩）、生徒同士は何語で話しましたか？」という質問項目を設け、調査では、談話の流れに応じ、適宜表現を変えて質問した。以下に、初等教育機関である公学校での言語使用についての談話を引用する。

なお、C氏は公学校ではなく、主として日本人子弟が通っていた小学校に入学し、学校内では全て日本語を使用していた。G氏は公学校での言語使用について、はっきりと記憶していなかった。I氏はH氏と同じ公学校で学んだ同級生であり、H氏の回答と同様だった。そのため、C・G・I氏を除いたインフォーマントの談話を取り上げる。

(1)「学校ではほとんど日本語。ほとんどじゃ、ずーずーっと、日本語。」[A]

(2)「そういうこと許されてなかったようですよ、先生に閩南語で話しするのは。」[B]

(3)「あの時はね、そんな（「学校の中では日本語しか話してはいけない」という意）感じはしなかった。

別に、特別、厳格にっていうあれはなかった。だから僕の頃、台湾語はね、ほんと学校で覚えた。友達全部（閩南系）台湾人だから。（日本語は）勉強の時使っておった。休み時間、両方、台湾語でやった。わたしの印象ではね。（先生とは）当然、日本語。日本人先生は日本語。」[D]

(4)「学校はみんな日本語。」[E]

(5)「もちろん学校では日本語です。」[F]

(6)「学校では閩南語、禁止ですからねえ、学校ではみんな日本語です。」[H]

(7)「学校の中、日本語ですよ。公学校の時は、初めて会った時は日本語できないでしょう？やっぱり台湾語を使います。だけど先生は、国語常用、国語常用で、叱るよ。学校におるときは、台湾語を使ったら、先生は聞かれたらね、目を丸くするよ。やっぱり学生の間は台湾語も使います。日本語も使います。だけど先生との話はみんな日本語。」[J]

学校内では全て日本語を使用していたと回答しているのは、A・B・E・F・H氏である。A・B・F・H氏の通った公学校では、日本語以外の言語を使用すると、鞭打ちや便所掃除、立ち番などの罰が与えられた。E氏が通った公学校には、言語罰はなかったが、E氏は学校では日本語を使っていたと述べている。

当時、公学校には漢族系の教師と日本人の教師がいた。¹¹⁾ インフォーマントによれば、低学年は漢族系の教師が、高学年になると日本人教師が学級を担当することが多かったそうであるが、B氏の公学校時代の担任教師は、1年生から6年生まで日本人だった。調査の結果、インフォーマントは漢族系の教師に対しても日本人教師に対する場合と同様、日本語を使用していたことがわかった。

教師に対しては日本語を使用した、生徒間では学校内でも閩南語と日本語を使っていたと答えているのはD・J氏である。D氏は、校内における言語使用について、特別、厳格に制限されていなかったと述べている。J氏の学校には言語罰はなかったそうであるが、閩南語を使うと教師に叱られた様子が談話資料(7)からうかがえる。公学校の生徒は、教師に対する使用言語は日本語と意識していたが、生徒間では学校内で日本語以外の言語を話すこともあったようである。

初等教育機関を卒業後、B氏はタイピスト養成所へ、B氏以外のインフォーマントは中学校・高等女学校に進学している。タイピスト養成所では使用言語に関してあまり厳しく制限されていなかったが、B氏は日本語を使用していた。また、中学校・高等女学校へ進学したインフォーマントは全員、学校内では全て日本語を使用していたそうである。

○学校以外

学校以外の公的場面については、「次の場所(商店・病院・郵便局・銀行・駅・図書館・役所)では、そこで働いている人と客の間で、何語が使われていましたか？それぞれ、「閩南系・客家系・日本人・その他」の別で答えて下さい。それはいつごろのことですか？」という質問を設け、談話の流れに応じて表現を適宜変えて尋ねた。各場面における言語使用状況について、以下にまとめておきたい。

当時、商店には、日本人向けの商品を扱う店と、漢族系向けの商品を扱う店があった。インフォーマントによれば、商店の多くは、漢族系、なかでも閩南系住民が経営していたそうである。日本人を相手に商売をしていた店では日本語が、漢族系相手の店では閩南語が、客家系の人々が多く住む地域では客家語も使われていたという。

病院には、漢族系と日本人の医師と看護婦がいた。当時、医師になるためには専門教育を受け、医師免許状を取得しなければならなかった。¹²⁾ そのため、漢族系の医師は高い日本語能力を持っていた。また、看護婦資格を授与された者が看護婦に従事していた¹³⁾ ため、漢族系の看護婦でも日本語能力があった。漢族系の医師や看護婦は、日本語ができない患者に対しては閩南語で、客家系の医師・看護婦は客家語でも対応していたようである。三星庄出身のH氏は漢方薬を扱う漢族系台湾人の医生¹⁴⁾ の治療を受けたことがあるが、医生は日本語ができなかったため、閩南語を使用したそうである。

郵便局・銀行・駅・図書館・役所などの窓口には、日本語能力のある漢族系の職員と日本人職員がいたが、漢族系の職員の方が多かったという。漢族系の職員は、日本語が分からない漢族系の人々に対しては閩南語、客家系の職員は客家語でも対応していたそうである。役所については、A・B氏が、台北市内の役所では日本語でなければ歓迎されなかったと述べたが、三星庄出身のH・I氏は、日本語のできる人が少なかった当該地域の郡役所では、日本語ができない人には閩南語で対応していたと語った。その他の地点の役所については、インフォーマントが利用したことがない等の理由により、確認できていない。

調査では、各場面においてインフォーマントがどの言語を選択したかについても質問したが、学校以外の公的場面でも、日本語能力を持つ漢族系の人々に対しては、主として日本語を使用していたそうである。

4-1-2. 私的場面

私的場面での漢族系台湾人に対する日本語使用として、友人と家族との使用言語について尋ねた。その結果、家族間で日本語が使用されていた事例もみうけられたが、友人間において広く使用されていたことがわかった。以下に、友人及び家族間における日本語使用状況について、みていこう。

○友人

友人との言語使用については、「親しかった友達について教えてください。その友達は「閩南系・客家系・日本人・その他」でしたか？その友達とは次の場合（学校（休み時間）で・町で・自分のうちで・友達のうちで・喧嘩の時）、何語で話しましたか？どんな内容の話でしたか？それは何歳頃のことでですか？」を質問項目に設け、インフォーマントとの自然な談話の流れに応じ、質問文の表現を適宜変えて尋ねた。以下に、公学校時代から中学校・高等女学校時代における、漢族系の友人との言語使用についてみてきたい。ここでの友人とは、インフォーマントと同じ学校で学んでいた学友を指す。

なお、C氏は日本統治時代、日本人社会で暮らし、親しかった漢族系の友人はいなかったため、C氏以外のインフォーマントの事例を取り上げる。G氏は日本内地の高等女学校に進学し、高等女学校時代の友人は全て日本人だった。J氏については、公学校時代の友人との使用言語が調査できなかった。そのため、G氏の談話は公学校時代、J氏の談話は高等女学校時代の言語使用について語った談話である。

(8)「(公学校時代) 結局、同じ客家系の人ね、自分のうちではね、三分の二が日本語、三分の一が客家語でね。閩南語の友達のところにおる場合はね、反対に、日本語三分の二で、閩南語三分の一。やっぱり同じようにこう、使ってる訳なんです。(中学校時代、教官のいないところで閩南語を) やっぱり話さないよね。もう習慣になってね、みんな日本語で使ってるわけですよ。」[A]

(9)「(友達が、自分のうちに来たときには) 日本語ですね、ほとんど。」[B]

(10)「(公学校時代、友達同士で教師のいないところで話す時について) そんな深い印象はないなあ。日本語で話したみたいだし、台湾語で話したみたいだし、何だかこう深い印象はない。非常に自然的に、恐らく日本語であればしゃべったり、台湾語でしゃべってたかもわからない。(中学校時代は) 当然日本語。」[D]

(11)「台湾人同士で日本語しゃべるってゆうよりも、閩南語使った、わたしが小さいときですよ、が多いですよ。もちろんやっぱり中学校になってからはねえ、やっぱりお友達なんかね、閩南語使わないし、客家語も使わない。みんな日本語で話しますけどねえ。中学校はもうほとんどお友達はみんな日本語。台湾人同士でも閩南語使いません。客家系の人に対しては、やっぱり客家語を使うことは

あります。日本語も使います。結局お互いにね、学校ではみんな日本語使ってるでしょう？ 閩南語使わないし、客家語も使わない。みんな日本語しゃべってるし、結局あと、もう日本語に慣れてしまってるからみんな日本語を使います。閩南語を使いません。」[E]

- (12)「学校以外、やっぱり公学校（時代）は台湾語使いますね。でも、彰化に通ってるときはもう公学校卒業してるでしょ？ だから、もう普通の日本語はべらべらしゃべれるから、台湾語使うことはないんです。もうその時は毎日毎日、家から出たらもう日本語です。うちの中以外、みんな日本語使っています。もう日本語が慣れてるんです。あたしにしては、その時の日本語が、生活のね、必要語になってしまってるんです。」[F]

- (13)「（公学校時代、学校以外で友達と遊んだりする時は）ほとんど客家語だなあ、話するの。」[G]

- (14)「町に出ると、自由に話して、閩南語と日本語一緒に混ぜてやります。中学校（時代）は、学校から出たら、やっぱり大方は日本語をしゃべります。」[H]

- (15)「（Hと話すときは）日本語と台湾語、チャンポンしとったかもわからん。日本時代はそう。学校に行ってるから、日本語を話さないけない。」[I]

- (16)「（女学校時代）学校で話すときは日本語で、台湾語、混ざらない。外ではちょっと混ざるんだけど、みんな日本語が多いんですよ。混ざるのは台湾語、少しだけ。」[J]

公学校時代、漢族系の友人同士で閩南語と日本語を使用していたと述べているのは、客家系のA・D・E氏と閩南系のH・I氏である。客家系のA・D・E氏は閩南系住民が多い地域に住み、公学校時代に閩南系友人との交友を通じて閩南語を習得している。A氏は、客家系の友人に対しては日本語と客家語を使っていたと語っている。客家系のB氏も公学校時代に閩南語を習得したそうだが、漢族系の友人とは日本語を使用することが多かったという。一方、閩南系のF氏と客家系のG氏は、友人とは日本語を使用せず、母語である閩南語、客家語を使っていた。

中学校・高等女学校時代になると、日本語の使用が中心になっていたことが、客家系のA・D・E氏と閩南系のF・H・J氏の談話から読みとれる。

以上の談話からは、話者によって多少の違いはあるが、私的場面において、漢族系の友人との間では、公学校時代は日本語を使用せずに母語である閩南語や客家語を使用したり、閩南語や客家語と日本語とを混ぜて話していたのが、中学校・高等女学校時代になると、日本語の使用が多くなっていった様子が、閩南系・客家系双方のインフォーマントにおいて観察される。

○家 族

家族に対する使用言語については、「家族間の使用言語を教えてください。」という質問項目を設け、家族の構成員相互でどの言語を使用していたかを尋ねた。

- (17)「（兄弟の間では）日本時代、ほとんど日本語で話してるよ。うちの中、日本語と客家語ですね。この二つ。兄弟の場合はね、日本語が三分の二で、客家語が三分の一。（両親は）2人とも日本語、あまり言えないからね。だからほとんど客家語で話してるわけですよ。日本語話せないからね。」[A]

- (18)「わたしはほとんど日本語使っています。わたしら時代ね、奨励してるでしょ、国語家庭ってね、国語家庭だったの、みんな日本語使ってる家庭。わたしなんかそれもらいました。お母さんもお父さんも日本語話せます。子供達もみんな話すからね。」[B]

- (19)「（両親間では日本語と客家語の）どちらでもしゃべれる。兄弟（との間では）、私、ほとんど日本語多いね。（兄弟と両親間では）やっぱり、日本語しゃべったり、客家語しゃべったり。（祖母と両親間では）ほとんど客家語で。（祖母と話者Cの間では）たまには簡単な日本語しゃべるけど、ま、客家語が多いね。（当時、客家語が）少しできた。簡単のできるが、難しいのでできない。聞いては分かるけど、言うのはあんまり、言えないね。（祖母は日本語を）うちで習ったの。しゃべってるうちに

習ったの。わたしなんかしゃべってるの習ったの。教えてあげた。」[C]

(20)「(両親との間では) 客家語が多かったよ。(父は日本語ができたが) やっぱり客家語話したよ。便利だからね。あの時、もう大きい妹が女学校だった。そのあとはまだ小さいから、日本語しゃべれない。(兄弟とは) 客家語で。」[D]

(21)「(家族とは) 全部客家語です。もう小さいときから客家語に慣れてしまってるね。自然と何だか。例えばうちの中で、姉が日本語話せるでしょう？それでも日本語話さないですよ。日本語できるけれど話さない。自然ともう、客家語でもう慣れてしまってるので。できるからといって日本語使うということはなかったですよ。」[E]

(22)「台湾語はちゃんと家ではね、使ってます。2 番目の兄さんとはね、なんていうかやっぱり混ぜて言うんです、日本語、台湾語とね。混ぜて話。しゃべりなんかしてる時日本語、三分の二ぐらい日本語。」[F]

(23)「(家族内で使っていた言語は) 客家語が多いね。(父は日本語ができたが) やっぱりいや、ほとんど客家語、使ってる。」[G]

(24)「(家族の中では) みんな閩南語です。」[H]

(25)「(うちの中で日本語を話すことは) あんまりないねえ。そら、話せるけどね、あまりない。というの、お母さん、年寄りにはできないです。あれは勉強してないから。お母さん学校行かない。大体うちはみんな台湾語で話す。(兄弟間でも) やっぱり台湾語。もちろんみんな台湾語。(母親がいないところで兄弟同士で話すときに) 恐らく日本語言わない。やっぱり習慣的に台湾語でしょう。」[I]

(26)「うちはみんな閩南語ですよ。(中略) 公学校行っても、家の中はみんなあのう、台湾語です。(兄弟同士で、日本語を) 話しません、台湾語です。」[J]

家庭内で日本語を使用していたのは、A・B・C・F氏である。B・C氏の家庭は国語常用家庭で、両親・兄弟共に日本語が堪能であった。C氏の家庭には日本語があまりできない祖母がおり、祖母の間では客家語も使われていたが、日本語を第一言語として育ったC氏の家庭内における使用言語は日本語が中心だった。A・F氏は、日本語ができる兄弟とは母語と日本語を混ぜて使用していたと述べている。

一方、D・E・G・I・J氏の家庭では、お互いに日本語能力があっても日本語を使用せず、家族間では母語を使用していた。H氏の家庭は、H氏以外は日本語ができず、家庭内では全て閩南語を使用していた。

4-2. 光復後—公的場面から姿を消していった日本語—

1945年10月25日の台北での投降式典により、日本による台湾の植民地統治が終了し、台湾は「光復(祖国復帰)」、つまり中華民国へ編入された。それに伴い、日本統治時代に台湾の国語とされた日本語にかわり、中華民国の国語である北京語が、台湾の国語として位置付けられた。学校教育においても、教授言語が日本語から北京語に切り替えられ、学校教育並びに社会全体を通じて北京語普及政策が展開された¹⁹⁾。

こうした大きな歴史的・社会的転換を迎えた光復後の台湾において、インフォーマントの言語使用はどのように変化したのだろうか。

光復後の日本語使用については、台湾の政治・社会事情を配慮し、今回は特に調査項目を設けなかったが、断片的ながら、数名のインフォーマントからお話を伺うことができた。

談話資料を分析したところ、日本統治時代には、公的場面において漢族系台湾人の間でも日本語が使用されていたのが、光復後は日本語が次第に使われなくなったことがわかった。しかし、私的場面では、光復後も日本語が使われ続けていたようである。

光復後の言語使用状況についての談話を、以下にみていこう。

4-2-1. 公的場面

次の談話では、光復後も、はじめは公的場面で日本語が使用されていたが、次第に公の場から日本語が姿を消していった様子が語られている。

(27)「初めはね、建築材料をやっておったわけです。(仕事の時使用していたのは) 結局、4カ国語、客家語と閩南語とそれから北京語と日本語。僕ら年輩の人は、あん時は20何歳だけでしょう。ほとんど日本語使っとるよ。光復の時は20歳ちょっとだからね、みんな日本語を使えるんだから、ほとんど日本語と、それから閩南語と、それから外省人はもちろん北京語ですね。それを使っておったわけなんです。(よく使ったのは) その時は日本語ですね。だんだんと変わってくるわけだ。(次にした建築業では) ほとんど日本語はあまり使わないけど、ほとんど閩南語と北京語と客家語ですね、これを使っておったわけなんです。」[A]

(28)「(光復後に勤めていた銀行で使用していた言語は) 中国語もあるし、台湾語もある。日本語も初めはちょっとしゃべっていたけどね、そのあと日本語禁止して、日本語使っていけないって言うから。(日本語で) 書くのはできない、書いたら叱られる。禁止されてるから、使っていけない。あの頃もう、みんな中国語だね。」[C]

(29)「僕ね、中学の先生になってるの。(民国) 35年(1946年) 9月に学校に入って、日本語で教えてる。生徒、まだ聞いて分かるから。(民国) 35年から翌36年2月まで日本語で数学を教えてた。(民国) 36年2月から36年の8月まで、今度は台湾語。次は大変だよ、中国語を勉強しなきゃ。9月からずっと今度、中国語に。(使用言語を変えたのは) 台湾、もう中国の祖国に帰ったでしょ? じゃ、台湾語に。中国語、あの時、わたし話せないから、今すぐにじゃ、台湾語に直すかって。日本時代じゃない、いけないと思ってね、自分で変えて。(自分) 自身がね、「ああ、こりゃあかん」と思って、日本語、台湾語に変えたの、自分でね。別に日本語で教えていけないと言われたわけじゃないのよ。台湾、中国に帰ったんだから、じゃ台湾語に変えようって。それで台湾語に変えたの。(教師間では) 台湾人は日本語でしゃべる。外省人は中国語でしゃべる。先生同士はね、台湾の人は日本語でしゃべってる。」[D]

(30)「あの時(光復時)は、私は国民学校の教員ですね。今までは日本語でしょ? 光復後は北京語に変わるでしょ? 北京語を習いながら、今日習って、みんな明日教える。こういう調子です。(中略) 戦後、学校では日本語、言ってはいけない。日本語禁止。」[H]

(31)「終戦後、急に北京語なんてできないでしょう? 終戦後、汽車通学で友達と汽車の中で、やっぱり日本語で話してたんです。そしたらね、そう大した学歴もないようなね労働者階級のような男、2・3人、同じ車中において、怒鳴られたんです。「今はもう祖国に帰ったのに、まだ国語を使ってる。」あたしはずいぶん怒鳴られたんです。そう怒鳴ったけど、あたし達にしては、向こうが何も教育を受けていないってことは分かるでしょう? 国語って言う代わりに日本語って言うべきでしょ? それを国語って言うんです。その時の国語はもう北京語なんです。それなのに嫌っていうまでに怒鳴られたことがあるんです。ですから、そのあと日本語のできない目上の方の前では日本語は使わない。それに、道でもやっぱり日本語は使わないです。何だかまた誰かに叱られそうね。終戦後、やっぱり何て言うか、日本に対してもう、敗戦国だし、今までの統治でやっぱり不満があるでしょう? 植民地だと言ってね。だから日本語を使うのは、公の前では避けてるんです。」[F]

(27)・(28)・(29)・(30)は、職場における言語使用に関する談話である。(27)はA氏が従事していた台北市内の建築材料・建設業関係の仕事で使用していた言語について、(28)はC氏が高等女学校卒業後、1947年から1952年頃まで勤めていた高雄市内の銀行での使用言語、(29)は屏東市内の初等中学の

教員になったD氏の教授用語、(30)はH氏が日本統治時代から教員として勤務していた三星庄内の国民学校での使用言語について、述べたものである。

仕事上、日本語の使用を禁止されたのは、C氏とH氏の職場である。(28)と(30)からは、C氏が勤めていた銀行と、H氏が教えていた国民学校で、日本語の使用が禁止され、北京語に切り替えられたことがわかる。

一方、D氏が勤務していた初等中学では、日本語の使用は禁止されなかったが、自分自身の考えで、日本語から閩南語へ、そして北京語に教授用語を切り替えたと、D氏は(29)で述べている。

A氏が働いていた職場では、光復当時は日本語・閩南語・北京語が使われていたのが、次第に日本語はほとんど使われなくなり、閩南語・北京語・客家語へと変わったと、A氏は(27)で述べている。日本語が使われなくなったのは、職場において日本語の使用が禁止されたためであったかどうかは確認できていない。

(31)は、光復当時、高等女学校の生徒だったF氏が、光復後も日本統治時代から通っていた高等女学校に汽車通学中、日本統治時代と同じように車中で友人と日本語で話していたところ、漢族系の男性に日本語を使っていることを怒鳴られたという経験である。この経験を機に、F氏は、日本語ができない目上の人物の前や、公の場面では日本語の使用を避けるようになったと語っている。

4-2-2. 私的場面

光復後、公的場面では次第に日本語が使用されなくなったにも関わらず、私的場面においては、学校の友人や日本語のできる家族との間で日本語が使い続けられていたことが、次の談話からうかがわれる。

(32)「うちでは(日本語を使っても)いいの。外面的は日本語禁止されたけど、うちはやっぱりそのまま継続よ。継続して(家族の呼称を)呼んだりして。もう呼び慣れてるから。」[C]

(33)「わたしなんか日本語、お友達とかね、例えばクラスメートなんか、やっぱり日本語使っていないと。やっぱり継続的にみんな日本語使った。終戦後は、当時はまだみんな日本語を使っておった。で、今度は学校では北京語でしょう、教えておったときも。どっちかという、やっぱりわたしにとっては日本語。(中略)わたし、お友達同士はもうみんな日本語使っておると。お友達とはねえ、日本語の方が通じやすい、話しやすい。(中略)北京語は北京語で一生懸命やってるけど、(友人間で)お互いにね、北京語は使わない。みんな日本語ですよ。(友人間で)北京語を話すときちょっとおかしいねえ。」[E]

(34)「終戦当時はやっぱり日本語で話してたんです。禁止はなかったんです。公の前ではできるだけ避けるんです、日本語をね、公の場合は。そうでないときはやっぱり日本語です。その方が慣れてるんですもん。たやすく話し合える。禁止って、そう覚えはないんです。(中略)話はそれは禁止してない。」[F]

(32)の話者C氏は、光復後に勤務していた銀行では日本語の使用が禁じられ、日本語を使わなくなったと(28)で述べていたが、(32)の談話からは、家庭内では依然として日本語を使い続けていたことがわかる。

(33)の話者であるE氏は、光復当時、中学校の生徒だった。調査において、E氏は光復後の北京語学習について、「あの時みんなね、今度、中国時代になったから、北京語を習わないといけない。みんな一生懸命習ったですよ。」と語っていた。E氏自身、北京語の学習に努め、北京語の演説大会で優勝するまでになったそうであるが、(33)の談話にみるように、日本統治時代からの学校の友人とは、日本語を使用し続けていた。

(34) の話者F氏は、(31) で語った汽車内で友人と日本語を話していて怒鳴られた経験以降、日本語ができない目上の人物の前や公的場面では、日本語の使用を避けるようになった。しかし、「話はそれは禁止してない」と認識し、私的な場面では日本語を使っていたと語っている。

C・E・F氏は、光復後も友人や家族の間で日本語を使い続けていたのは、「呼び慣れてる」[C]、「日本語の方が通じやすい、話しやすい」[E]、「慣れてる」「たやすく話し合える」[F] ためだったと述べている。

今回の調査では、C・E・F氏以外のインフォーマントが、光復当時、私的場面においてどのように言語を使用していたかについては、確認できていない。

4-3. 現在—漢族系台湾人高年層間における私的場面での日常的な使用—

光復後の台湾では、日本語だけでなく、閩南語・客家語、そして原住民の言語についても、長い間、学校教育やマスメディアでの使用が制限されていた。¹⁶⁾ その状況が、1980年後半以降の政治的变化に伴って変化を見せ、現在では公共の場において、北京語だけでなく、閩南語、客家語も使用されるようになってきている¹⁷⁾。

調査の結果、インフォーマントは光復後は公的場面での日本語使用を控えていたのが、その後50年以上が経過し、政治的状況も変わった現在では、公的場面においても日本語を使用していることがわかった。現在、公的場面において、日本人だけでなく、台湾の原住民や韓国人、アメリカ人との間で、共通語として日本語を使用することがあるそうである。漢族系台湾人との間では、現在は公的場面よりむしろ私的場面において、同世代の友人や配偶者との間で日常的に使用しているという。

私的場面における、友人及び家族との現在の日本語使用状況について、みていこう。

○友 人

漢族系の友人との現在の使用言語については予め調査項目を設けなかったが、調査ではA・B氏以外のインフォーマントからお話を伺うことができた。以下の談話には、日本語能力がある同世代の漢族系台湾人、特に中学校・高等女学校時代の同級生とは、現在でも日本語を使っていることが述べられている。

(35) 「お友達によっても違います。台湾人の友達は台湾語しゃべる。客家語の人に客家語しゃべる。日本語できる人にはたまに日本語混ぜてしゃべる。日本語できるって、やっぱり年いった人じゃないと。今、若い人しゃべらないでしょ？できてないからね、言ってもしょうがない。」[C]

(36) 「(中学校のクラスメートとは) やっぱり日本語で。今、話す時、どっちかっていうと日本語が先に。台湾語でしゃべるなんて、あり得ない。」[D]

(37) 「今、昔のクラスメートに出会って、やっぱり日本語話してる。やっぱり、そう慣れてしまったの急に变えるの、何だかちょっとおかしくなる。クラスメートなんかね、昔のね、やっぱり日本語使いますよ。」[E]

(38) 「特に、(高等女学校の) クラスメートなんかと話し合う時、同窓会の時、ほとんどがみんな日本語をしゃべるんですよ。混ぜて言いますけどね。台湾語で言えない場合、北京語で言えない場合はやっぱり日本語で。」[F]

(39) 「(現在入っている老人大学では) ほとんど福建語を話してるね。これがあまり北京語を話せない。日本語ときどき入る。日本語と福建語、この2種類だけ。」[G]

(40) 「(I氏とは閩南語と日本語が) ごちゃ混ぜ。気の進む次第。」[H]

(41) 「僕のような同じ頃のね、(漢族系台湾人) などに会えば、やっぱり日本語話します。日本の思い出

話（を）したくなります。中学時代の同窓と言えば、やっぱり日本時代。だから日本時代のことを思い出して語ろうと思ったら、やっぱりさっ和日本語が出やすいでしょう、ね？日本語でやる。」

[I]

(42)「同窓会の時は、日本語を使うのが多いですよ。」[J]

(38)・(42)の話者、F・J氏が在籍した高等女学校は、現在、同窓会活動がそれぞれ頻繁に行われているそうである。(38)・(42)の談話には、同窓会において日本語が多く使用されていることが述べられている。

E氏は、光復後の中学校の同級生との使用言語について、「北京語を話すとちょっとおかしいねえ。」と(33)で語っていたが、(37)でも「慣れてしまったの急に変わるの、何だかちょっとおかしくなる」ため、現在でも同級生とは日本語を使っていると述べている。

A氏とB氏には、現在、年代の漢族系の人々や学生時代の同級生との間で、どの言語を使用しているか尋ねなかった。しかし、A氏とB氏の調査に同席した、A氏の中学校時代の同級生であるH氏との会話で、他言語と日本語を混ぜて話しているところを確認した。

○家 族

家族の習得言語について、「ご家族の方は、何語がお出来になりますか？」という質問項目を設け、調査では、インフォーマントとの間で使用されている言語についても尋ねた。閩南系のインフォーマントは閩南系同士、客家系のインフォーマントは客家系同士で結婚しているが、日本語能力がある配偶者との間では、日常的に日本語が使われていることがわかった。以下に、配偶者との日本語使用に関する談話を引用する。

(43)「家の中ではね、家内と半分は日本語、半分は客家とね、それから閩南語、チャンボンして話しとる。無意識に話し出すのは日本語ですよ。自分、今、家内と話してるのは一体何語か自分、頭がない。自然とね、使い慣れた言葉、すぐ出て来るんだ。家内に「あ、お茶持ってきてくれ」これ、無意識に言い出すんだよ。故意に日本語使って言ってるんじゃないんだよ。無意識に話し出すわけです。(中略)今まで使ってきたし、話してきたんだからね。だからいつも日本語で無意識に使ってしまうんだよね。(中略)習慣って言うよりかね、使い慣れてるから、日本語に、無意識に夫婦でいつも話してるからね、そうなるんですよ。」[A]

(44)「無意識的に日本語話してる。どっちでも通じるからね。わたしも(Aの意見と)おんなじです。」[B]

(45)「うちらと二人(C氏とE氏)、(日本語を)よくしゃべるから、子供聞いて(日本語が)わかるんですよ。あんまりしゃべれないけど。聞く方はまだできる。」[C]

(46)「二人(D氏とG氏)で日本語。(客家語と日本語の)チャンボンになってる。」[D]

(47)「(C氏とは)客家語と日本語だね。」[E]

(48)「家の中では、嫁先の舅は日本語言えないから、絶対に主人とは日本語で話さないんです。でも部屋だとか、舅がいない時は日本語で話してるんです。恐らくあたしだけじゃないと思います。(日本語ができる主人とは)日本語で話します。何だか話しやすいんです。とっても自然に。小さい時からずーっと習ってきた言葉でしょ？」[F]

(49)「うち、主人(D氏)とは(客家語と日本語の)チャンボンやってるけどね。」[G]

(50)「日本の消息話すなら、やっぱり日本語話す。決まってないですよ。そん時、(閩南語と日本語を)適当に混ぜて話す。必ずしも台湾語で言う、あるいは(日本語で言う)と決まってない。自分の気が向いた時に日本語で言って、日本のこと聞くこともある。日本時代のことを持ち出すと、やっぱ

り日本語になる。」[I]

(43)・(44) の話者A氏とB氏、(45)・(47) の話者C氏とE氏、(46)・(49) の話者D氏とG氏は夫婦である。(50) のI氏の配偶者はJ氏であるが、J氏がI氏に対して使用している言語については、J氏本人に確認できていない。I氏によれば、J氏は光復後40年間、国民学校教員として北京語による教育を行ってきたため、J氏との間では北京語が混ざることもあるそうである。

配偶者との日本語使用に関する上の談話で注目されるのは、(43)・(46)・(47)・(49)・(50)において、「半分は日本語、半分は客家とね、それから閩南語、チャンボンして話しとる」[A]、「(客家語と日本語の) チャンボンになってる」[D]、「客家語と日本語だね」[E]、「(客家語と日本語の) チャンボンやってる」[G]、「(閩南語と日本語を) 適当に混ぜて話す」[I] と述べていることである。

こうした、閩南語や客家語と日本語を「チャンボン」「混ぜて話す」というスピーチスタイルは、先に見た友人との日本語使用についての談話、(35)・(38)・(39)・(40) の、「日本語混ぜてしゃべる」[C]、「混ぜて言います」[F]、「日本語ときどき入る。日本語と福建語」[G]、「ごちゃ混ぜ」[H] にもみられる。

現在、日本統治時代に日本語による教育を受けた漢族系台湾人高年層間において日本語が使用される際には、閩南語あるいは客家語と日本語が混ぜて話されることが、特徴として指摘できよう。話者によっては、更に北京語も混ざることがあるようである。

5. 漢族系台湾人高年層における日本語使用

5-1. 「「台湾人」標準日本語」と「「台湾人」俗日本語」一場面と相手による使い分け—

以上、談話資料の分析を通じて、インフォーマントが、「日本統治時代」・「光復後」・「現在」の各時代・時期において、どのように日本語を使用してきたかをみてきた。

まず、日本語が使用された場面と相手について、整理しておきたい。

日本統治時代は、公的場面・私的場面双方において、漢族系台湾人の間で日本語を使用していた。学校では日本語の使用が中心だった。一方、漢族系の人々と日本人が混在していた学校以外の公的場面では、日本語、閩南語、更に地域によっては客家語も使用されていたようである。しかし、こうした場面においても、インフォーマントは、多くの場合、日本語能力を持つ漢族系台湾人に対して日本語を使用していた。私的場面では、日本語能力のある家族と日本語を使っていたインフォーマントもいたが、主として学校の友人との間で、広く日本語を使用していた。

日本語にかわって北京語が国語として位置付けられ、社会全体において北京語普及政策が展開された光復後は、公的場面においては次第に日本語を使用しなくなった。しかし、私的場面においては、日本統治時代に日本語を使用していた学校の友人や家族との間で日本語を使い続けていた。

現在は、公的・私的場面で日本語を使用している。漢族系台湾人との間では、公的場面より、むしろ私的場面において、中学校・高等女学校の同級生や、日本語のできる配偶者との間で日常的に使用している。

以上の結果から、公的場面における日本語の使用は台湾の政治・社会状況に応じて変化しているが、私的場面においては、日本統治時代に日本語による教育を受けた漢族系台湾人の間で、日本統治時代から現在まで日本語を使用し続けてきていることがわかる。また、インフォーマントの私的場面における日本語の使用相手は、通時的にみると日本統治時代に教育を受けた中学校・高等女学校の同級生であり、現在は日本語能力のある配偶者との間でも日本語を使っている。閩南系・客家系間だけでなく、閩南系

同土・客家系同土といった同じ言語集団に属する漢族系間においても日本語を使用しているのである。

更に、インフォーマントの日本語の発話形態に着目すると、私的場面において漢族系台湾人の間で日本語が使用される際には、閩南語あるいは客家語と日本語を混ぜるというスピーチスタイルが、通時的に観察される。

合津（2000）は、戦前の先行研究、及び台北市出身のインフォーマントA・B氏への調査結果の分析を通じて日本統治時代における台北市在住漢族系台湾人の日本語使用を考察し、日本語学習経験のある漢族系住民が、公的場面と私的場面でそれぞれ異なる言語変種を使用していたことを指摘している。そして、日本語学習経験のある漢族系住民が、公的場面において日本人や漢族系住民に対して使用していた比較的標準的な日本語を「台湾人」標準日本語」、私的場面において漢族系間で使用していた他言語と日本語が混じった言語変種を「台湾人」俗日本語」と名付けている。

今回の面接調査において、閩南語・客家語を解しない日本語話者である論者に対し、インフォーマントは全員、比較的標準的な日本語を使用していた。録音機材を前にした面接調査は、インフォーマントにとって、公的な場面として意識されていたであろう。一方、私的場面での漢族系台湾人との日本語使用については、談話資料を分析した結果、台北市のインフォーマントと同様、他の地点のインフォーマントにおいても、閩南語あるいは客家語と日本語を混ぜるというスピーチスタイルが、日本統治時代だけでなく、現在も認められた。北京語が国語として位置付けられてから50年以上が経過し、台湾社会に広く普及した現在では、話者によっては更に北京語も混ぜることがあるようである。このことから、台北市出身のインフォーマントだけでなく、日本統治時代に日本語による教育を受けた他の地点のインフォーマントも、比較的標準的な日本語である「台湾人」標準日本語」と、他言語と日本語が混じった「台湾人」俗日本語」という二つの変種を現在も保持し、場面や相手によって使い分けしているといえよう。つまり、現在、インフォーマントは公的場面では「台湾人」標準日本語」を、私的場面において日本語のできる漢族系台湾人との間では「台湾人」俗日本語」を使用していると考えられる。

5-2. 「台湾人」俗日本語」使用の要因

社会言語学では、ある特定の言語・またはその言語の下位変種である地域方言や社会方言の体系・要素を「コード」という術語で扱っている。閩南語・客家語・北京語とともに、「台湾人」標準日本語」と「台湾人」俗日本語」という変種も、それぞれ一つのコードであると捉えることができるとすると、インフォーマントは、場面や相手によって、コード・スイッチングを行っているといえることができる。インフォーマントは、日本統治時代に日本語による教育を受けた中学校・高等女学校の同級生や配偶者との間では、閩南語あるいは客家語、北京語といったコードを共有しているにも関わらず、なぜ「台湾人」俗日本語」という日本語の混じったコードを選択し、使用しているのだろうか。

近年、語彙借用から言語混交（language mixing）、コード（言語）切り替え（code switching）といった言語現象は、談話的な機能や社会心理的な機能を果たしていることが明らかにされてきている¹⁸⁾。インフォーマントが中学校・高等女学校の同級生や配偶者に対し、日本語が混じった「台湾人」俗日本語」というコードを選択しているのは、このコードを使用することによって得られる発話機能に価値を見いだしているためではないかと考えられる。本論では資料の不足により、談話的な機能について触れることはできないが、日本統治時代の中等・高等教育機関の学生と日本語の関係を考察することによって、日本語が混じった「台湾人」俗日本語」というコードのもつ社会心理的な機能について、以下に考えてみたい。

日本統治時代、漢族系子弟に対する中等・高等教育機関の整備は、初等教育に比べ、遅れていた。1922年2月6日の台湾教育令公布以後、中等教育以上は日本人子弟と漢族系子弟の完全共学制が実施されることとなった¹⁹⁾。これにより、制度上は漢族系子弟に対する中等・高等教育の門戸が広げられた。しかし、中等学校の入学試験は全教科が日本語で行われ、入試問題は小学校の教科書を出典とすることが多かった。そのため、漢族系子弟が日本人子弟と同一の入学試験を受けて合格することは容易ではなく、漢族系子弟にとって中等学校以上の学校に進学することは、かなりの難関であった。表4は、1938年度の台湾島内の中学校・高等女学校の入学状況を示したものである²⁰⁾。日本人子弟に比べ、漢族系子弟の合格率はかなり低いことがわかる。また、「中学生時代は町に何名の中学生までが（いるか）、数えられるんだ」[A]、「この村、わたしだけ日本語できます。日本語よく通じるのはわたくしだけです。中学卒業、わたくし一人だけですよ。」[H]といったインフォーマントの談話からも、中等学校へ進学できた漢族系子弟がいかに少なかったかが推測できよう。

() 内は合格率を表す

	志 願 者 数				入 学 者 数			
	日本人	漢族系	その他	計	日本人	漢族系	その他	計
中 学 校 (計14校)	1,925	5,248	24	7,197	1,266 (65.8)	724 (13.8)	4 (16.7)	1,994 (27.7)
高等女学校 (計15校)	2,610	2,244	7	4,861	1,412 (54.1)	676 (30.1)	3 (42.9)	2,091 (43.0)

表4 中学校・高等女学校入学状況（1938年4月30日現在）

また、日本人子弟と完全共学制であった中等・高等教育機関で学ぶことのできた漢族系子弟は、高い日本語能力を有していることを意味していた。「公学校、日本語は使えます。使えますけど、アクセントやら、それからやっぱり中学とはレベルが違うんです。」[F]、「国民学校の者、日本語、そうすらすら言えないです。」[H]といった談話からも、初等教育段階の漢族系子弟と中等教育以上の教育機関で学んでいる漢族系子弟とは、日本語能力に大きな差があったことがうかがえる。

こうしたなか、中等・高等教育機関の学生という集団に所属することができた少数の漢族系子弟にとって、当時、学校教育言語として位置付けられていた日本語が、中等・高等教育機関の学生としてのアイデンティティの拠り所となった。インフォーマントが、日本統治時代から現在まで中学校・高等女学校の同級生に対し、「「台湾人」俗日本語」というコードを選択しているのは、漢族系台湾人が使用している閩南語あるいは客家語と、日本統治時代の中学校・高等女学校の学生としてのアイデンティティを象徴している日本語が混じった「「台湾人」俗日本語」を使うことによって、漢族系台湾人でありながら、中等・高等教育機関の学生という集団に所属することができた同級生との間で、仲間意識・連帯意識を確認し、共有し合うことができるためではないかと考えられる。

6. おわりに

本論では、言語生活史調査で収録した談話資料を分析し、日本統治時代に日本語による教育を受けた漢族系台湾人高年層の日本語使用を通時的に捉えることを試みた。そして、漢族系台湾人高年層間において日本語を使用し続けている理由を社会言語学的な観点から考察し、以下の3点を指摘し得た。

- ①公的場面における日本語の使用は台湾の政治・社会状況に応じて変化しているが、私的場面においては、日本統治時代に教育を受けた漢族系台湾人の間で、今なお日常的に日本語を使用し

続けている。

②現在、公的場面で使用しているのは比較的標準的な日本語である「**「台湾人」標準日本語**」、私的場面において中学校・高等女学校時代の同級生や日本語のできる配偶者との間で使用しているのは他言語と日本語が混じった「**「台湾人」俗日本語**」である。

③中学校・高等女学校時代の同級生との間で「**「台湾人」俗日本語**」を使用しているのは、日本統治時代の中学校・高等女学校の学生としてのアイデンティティを象徴している日本語が混じった「**「台湾人」俗日本語**」を使うことによって、仲間意識・連帯意識を確認し、共有し合うことができるためではないかと考えられる。

以上、本論では、漢族系台湾人高年層の日本語使用意識について考察した。今後は、漢族系台湾人高年層が使用している「**「台湾人」標準日本語**」と「**「台湾人」俗日本語**」という二つの変種の言語的特徴を明らかにしたい。

現在、漢族系台湾人高年層が使用している日本語は、日本人以外の民族集団で使用されている民族方言であり、日本国外で使用されている地域方言とも位置付けられる。日本統治時代を生きた人々の高齢化が進むなか、漢族系台湾人高年層における日本語は、まさに消滅の危機に瀕する日本語の一方言であるといえよう。日本語教育史研究上のみならず、言語学的見地からも、漢族系台湾人高年層が使用している日本語の記述的研究を進めることは、焦眉の課題であると考えられる。

付記：調査に御協力下さいました台湾の皆様、心からの謝意を表します。本論は、平成10年度信州大学大学院人文科学研究科修士論文「台湾における日本語普及一言語生活調査を通じて―」の一部を、大幅に書き改めたものである。研究を進めるにあたり、信州大学人文学部沖裕子助教授より懇切なるご助言とご指導を賜りました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 戴 (1986)、戴 (1988) pp.10-24、原 (1998) を参照。
- 2) 1934年末現在の人口は、井出 (1937) pp.18-19、及び台湾総督官房調査課 (1938) pp.28-19による。
- 3) 黄 (1993) pp.20-21。
- 4) 1935年末現在の人口は、台湾総督官房調査課 (1937) pp.32-39による。
- 5) 台湾総督官房調査課 (1928) より作成。なお、台湾総督官房調査課 (1928) に掲載されている表は、出身省別 (福建省：泉州府・漳州府・汀州府・龍巖州・福州府・興化府・永春府、広東省：潮州府・嘉應州・惠州府、その他) の統計となっている。p.2の凡例に「本表福建省の欄に、汀州府を掲げ、又広東省の欄に潮州府を掲げあり、政治上の区劃は此の如くなり」とあるため、本論の表2は、語系別に閩南系を「泉州府・漳州府・龍巖州・福州府・興化府・永春府・潮州府」、客家系を「汀州府・嘉應州・惠州府」出身として計算し、作成した。
- 6) 1922年2月6日の台湾教育令によって、漢族系児童でも日本語能力があり、小学校に入学しても教育に差し支えない者に限り、希望によって小学校の入学が認められることとなった。台湾教育会編 (1939) p. 356。しかし、小学校に入学できた漢族系児童は非常に少なく、台湾教育研究会編 (出版年不詳) pp.59・70-72によると、例えば、1938年4月現在、台湾全島の初等教育機関に在籍していた漢族系児童数は総計506,835人、うち公学校在籍者が503,624人 (全体の99.4%) に対し、小学校在籍者はわずか3,211人 (同0.6%) だった。
1941年3月に国民学校令が公布され、公・小学校の名称は全て国民学校に一括されたが、日本語を常用するか否かで日本人子弟と漢族系子弟を分けて教育することには変わりにはなかった。上沼 (1975) pp.355-367。
- 7) 国語常用家庭とは、家族全員が日本語を常用し、皇民生活を営む家庭である。国語常用家庭になるには、州・庁の国語家庭審査員によって日本語常用の他に生活態度の様々な面にわたる審査を受け、認定されなければならなかった。国語常用家庭に対しては、官公署吏員への採用などの特典が与えられた。鍾 (1993) pp.207-208。

- 8) 蔡 (1989) 参照。
- 9) 公学校規則第 1 條。台湾教育会編 (1939) p.229。
- 10) 上沼 (1975) pp.350-351、戴 (1988) pp.80-82。
- 11) 台湾教育研究会編 (出版年不詳) p.82によれば、1938年 4 月30日現在の台湾全島の公学校教員数は合計7,928人、その内訳は、日本人4,603人、漢族系台湾人3,285人、原住民40人であった。
- 12) 井出 (1937) pp.926-928。
- 13) 井出 (1937) p.930。
- 14) 井出 (1937) p.927によれば、医生とは漢方医学によって治療をなす者のことである。台湾総督府は西洋医学を奨励し、1901年に台湾医生免許規則を制定して医生を取り締まり、同年以後は新たに免許を与えなかったため、逐年減退していったという。しかし、鈴木 (1934) p.85には、「一般民衆は今尚習慣の久しき漢方医に依る者多く」という記述がある。
- 15) 光復後の台湾における言語政策については、何 (1997)、高橋 (1997)、陳 (2001)、豊田 (1968)、樋口 (1995) を参照。豊田 (1968) pp.157-158によれば、1946年 3 月 9 日に「実施弁法」という北京語普及政策の実施規程を記した法令が公布された。その第 7 条には「一、期を分けて国語伝習班をつくり、まず国民学校教員について伝習を実施する。つぎは公務員とし、つぎは一般市民におよぼす。公務員は県市政府の期間指定により、一般市民は自由参加とする。」と記されている。
 樋口 (1995) p.30によれば、初期の北京語普及運動の戦略は、日本語を排除して閩南語を復興し、つぎに閩南語を排除して北京語の普及を完成するというものだったという。
- 16) 1956年より学校をはじめ公共の場所での北京語の使用が義務づけられ、閩南語・客家語・原住民の諸言語の使用が禁止された。1976年には「広播電視法」が制定され、ラジオやテレビ、映画などのメディアにおいても北京語の使用が義務づけられた。閩南語のテレビ番組は一日一時間余りの放送枠が確保されたが、客家語や原住民の言語を使った番組は皆無であったという。高橋 (1997) pp.42-43。
- 17) 月田 (1997)、陳 (1998) 参照。
- 18) 久山 (2000 a・b)、ナカミズ (2001)、ロメイン (1997) 参照。ブラジルの日系一世が話す日本語の談話におけるポルトガル語の借用を調査した久山 (2000 a・b) は、日系一世がポルトガル語借用によってアイデンティティーを表示したり、会話を円滑に運んでいることを明らかにしている。
- 19) 台湾教育会編 (1939) pp.109-118、770-771。
- 20) 台湾教育研究会編 (出版年不詳) pp.106-107、112-114より作成。

参考文献

- 井出季和太 1937 『台湾治績史』台湾日日新報社 (復刻版『台湾治績史』青史社)
- 井出 祥子 1992 「言語とアイデンティティー」『月刊言語』第21巻第10号 大修館書店
- 荻野 綱男 1995 「台湾における閩南語と北京語の使い分けについて」『東京大学言語学論集』14 東京大学文学部
- 何 義 麟 1999 「「国語」の転換をめぐる台湾人エスニシティの政治化—戦後台湾における言語紛争の一考察—」『日本台湾学会』1号 日本台湾学会
- 甲斐ますみ 1996 「台湾人老年層の日本語—彼らの言語生活から—」『言語探究の領域 小泉保博士古稀記念論文集』大学書林
- 1997 「台湾人老年層の言語生活と日本語意識」『日本語教育』93号 日本語教育学会
- 上沼 八郎 1975 「特殊研究二 台湾教育史」梅根梧監修・世界教育史研究会編『世界教育史大系 2 日本教育史 II』講談社
- 簡月 真 1999 「台湾における言語使用変化—「年齢×領域」を観点とした考察—」『第 4 回 社会言語科学学会研究大会予稿集』社会言語学会事務局
- 2000 「台湾の日本語」『国文学 解釈と鑑賞』第65巻 7号 至文堂
- 久山 恵 2000 a 「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用—借用頻度と社会的要因との関連性について—」国立国語研究所『第 7 回国立国語研究所国際シンポジウム第 1 専門部会 日系ブラジル

- 2000 b 「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用—その形態と運用—」『社会言語科学』第3巻第1号 社会言語科学会
- 黄 宣範 1993 『語言・社会與族群意識』文鶴出版有限公司
- 合津 美穂 2000 「日本統治時代における台北市在住「台湾人」の日本語使用—社会的変種の使用について—」『信州大学留学生センター紀要』第1号 信州大学留学生センター
- 小林 隆 1996 「現代方言の特質」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院
- 蔡茂 豊 1989 『台湾における日本語教育の史的研究—1985年～1945年—』東呉大学日本文化研究所
- 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹 1992 『社会言語学』おうふう
- 鍾清 漢 1993 『日本植民地下における台湾教育史』多賀出版
- 鈴木清一郎 1934 『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』台湾日日新報社（復刻版『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』南天書局有限公司）
- 戴 国 輝 1986 「漢族系住民の言語と歴史」戴国輝編『もっと知りたい台湾』弘文堂
- 1988 『台湾—人間・歴史・心性—』岩波新書
- 台湾教育会編 1939 『台湾教育沿革誌』（復刻版『旧植民地教育史資料集4 台湾教育沿革誌』青史社）
- 台湾教育研究会編 出版年不詳 『昭和15年版 台湾学事年鑑』
- 台湾総督官房調査課 1928 『台湾在籍漢民族郷貫別調査』
- 1937 『昭和十年 台湾総督府第三十九統計書』
- 1938 『昭和十一年 台湾総督府第四十統計書』
- 高橋 晋一 1997 『台湾 美麗島の人と暮らし再発見』三修社
- 陳 淑美 1998 「いま再び論議を呼ぶ台湾語を考える」『光華』（中日文版）光華書報雜誌社
- 陳 培豊 2001 「「異心同体」の漢民族ナショナリズム—植民地解放後、台湾における国語転換の場合—」『ことばと社会』編集委員会編『ことばと社会』5号 三元社
- 月田 尚美 1997 「台湾」『月刊言語』第26巻第11号 大修館書店
- 豊田 国夫 1968 『言語政策の研究』錦正社
- トラッドギル, P. 著、土田滋訳 1975 『言語と社会』岩波新書
- ナカミズ, エレン 2001 「移民とことば」ロング, ダニエル・中井精一・宮治弘明編『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社
- 原 英子 1998 「民族と言語」若林正丈編『もっと知りたい台湾 第2版』弘文堂
- 樋口 靖 1995 「国語と台湾語」笠原政治・植野弘子編『アジア読本 台湾』河出書房新社
- 村上 敬一 2001 「コード選択と言語使用」ロング, ダニエル・中井精一・宮治弘明編『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社
- 寥 英助 1994 「台湾原住民の社会における日本語の使用状況—タイヤル族を中心に—」『日本語学』第13巻第13号 明治書院
- ロメイソ, S. 著、土田滋・高橋留美訳 1997 『社会のなかの言語』三省堂
- ワインライヒ, U. 著、神島武彦訳 1976 『言語間の接触—その事態と問題点—』岩波書店1